

「精神分裂病」の診断名変更のお知らせとお願い

平成 14 年 8 月 15 日

社団法人 日本神経精神学会
理事長 佐藤 光源

1. 医学用語 schizophrenia の和訳が「精神分裂病」と決定された経緯と問題点

1911 年に Bleuler によって提案された schizophrenia (Schizophrenien) は、当初は翻訳が一定しなかったが、1937 年に神経精神病学用語統一委員会によって「(精神)分裂病」と定められた。しかし、原語の「分裂 schizo」は、「太陽・・・暑い」などの言語連想が分裂したという意味であり、schizophrenia は「連想の分裂を特徴とする精神病」という意味である。「精神分裂病」という表現は、精神そのものが分裂しているかのように誤解をされやすく、過剰な翻訳といえる。また、連想の分裂がこの疾患の本質であるという考えは、Bleuler 以後の精神医学会では支持されていない。さらに、schizophrenia が欧米の一般人には意味の理解しにくいラテン語表記であるのに対し、「精神分裂病」は日常語による表現となっている。そのために「分裂」という表現のもたらす誤解が一般社会に広まり、患者・家族に苦痛を与えるという、日本に特有の現象が生み出されている。

2. 用語を変更してほしいとの要望

1993 年、患者の家族団体である「財団法人 全国精神障害者家族会連合会」より、日本精神神経学会宛に、病名変更の要望が出され、それを受けて、用語に関する検討委員会が発足した。同委員会での検討を経て、医学的に支持されていない分裂概念を病名に織り込む必要は無く、また「精神の分裂」と誤解されることによって、患者、家族に多大な苦痛を与えていることが明らかになった。

この悲劇的な意味のために、多くの医師は患者に病名を伝えることをためらっており、「精神分裂病」の病名の告知率は国立病院 5 施設調査において 20% に満たない。現在、この疾患の治療法は大きく進歩し、医学的な予後は改善され、社会的な支援体制も拡充されている。今後、患者の自己決定権とノーマライゼーションを尊重し、適切な医療ならびに社会支援を推進する上でも、患者、家族、社会と共有でき、学術的にも適切な病名が求められる。

3. 「統合失調症」の採択

委員会においては、病名変更それ自体の必要性への学会員への意識を探るとともに、理解を求めてきた。1996 年と 1997 年には学会員を対象としたアンケート調査を行い、1997 年と 2000 年には学会シンポジウムを、1999 年には、ドイツハンブルグの世界精神医学会で、シンポジウムを開催した。2001 年には、評議員へのアンケート、公聴会、家族会との共催による市民アンケートを通じ、「統合失調症」が選ばれた。その理由の概要は以下のとおりである。

- 1) 原語の schizophrenia を穏やかに翻訳しなおしたものであり、混乱が少ない。
- 2) 各種アンケートから、患者、家族がこの病名を比較的受け入れており、医師の側も、患者、家族への説明に際してもっとも使いやすいと感じていた。
- 3) 統合失調とは、思考などのまとまりがなくなった状態を意味し、現象としてはこの疾患以外にも広く見られ、スティグマとなりにくい。また、失調には近年の治療・支援の進歩による回復可能性という意味が反映されている。
- 4) 「一病」は、疾患的な実態を予測させるので、現象による命名であることを強調して「一症」とした。
- 5) 国際診断基準では、精神疾患は disease ではなく disorder と表記されており、これは精神現象による類型分類を表している。新しい用語は、この流れとも合致している。